

受講番号 18087 学校名 越知中学校 氏名 吉岡 美佐

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 1年B組 生徒数 35名 名
 科目名 1年 単位数(授業時数) 3 時間 使用教科書名 NEW CROWN ENGLISH COURSE

クラスの様子・特徴

1年生らしく、明るく活発に授業に参加できる。落ち着いた聞くところは聞き、けじめのついている学級である。班学習も声をかけ合って取り組み、良いムードで行うことができる。学力的には課題もまだまだ多く、家庭学習もまだあまり定着していない。

問題の確定

家庭学習の習慣があまりないため、基本である単語力に不安を感じる。したがって、とりわけ作文力には大きな課題が見られる。

予備調査

A 授業の観察

読む・書く・話す・聞く、の各領域の学習時間を毎時間取ってきたが、中でも「書く」ことについては、生徒自身に苦手意識が見られ、単語のテスト時は自信がない発言も多い。授業中の教師への質問も作文の課題中にもっとも多い。

B 生徒による授業評価

授業評価システムのアンケート結果や単語のテストの結果から見ても、生徒自身、書く力を課題と自覚している。リスニングは自信が高いのだが、単語を覚えることにつまづきを感じていたり、作文課題を苦手と答える生徒が多かった。

C 学力データ

単語のテスト結果や定期試験の結果では、書く力の領域の得点率が低い。単語のテストの平均点は次第に下がっている傾向にあり、意欲を高めるような何らかの手だてが必要である。作文問題については、be動詞の用法の基礎知識からの問題も見られた。

リサーチ・クエスチョン

豊かに自己表現しようという意欲を持って、大半の生徒が基本文を一步応用したレベルの作文ができるようにするにはどのような指導をすればよいのか。

仮説・実践・検証

仮説1

評価を工夫すれば、意欲が高まるであろう。

実践1

1学期の期末テスト、2学期の中間テスト、2学期の期末テストの際に、聞く力・会話力・読解力・作文力に分けて点数を記載した。4技能の達成率を%で示した英語の通知票を作り、1人1人評価した。また、日頃の単語のテストの結果を10点分に換算し、テストの100点中に組み込んだ。日頃の単語のテストの結果を棒グラフに記録して残差を、日々のがんばった成果が目に見えるように工夫した。

検証1

テスト後に評価システムのアンケートを実施したが、「単語のテストをがんばれた」「単語のテストでオール満点目指してがんばったが、達成できて良かった」というような意欲的な記載が多く見られた。書く力を克服課題と感じている生徒には、評価の工夫によって達成感を得られたようである。また、2学期の中間テストよりも、期末テストの方が、単語のテストの平均点が上がった。その結果、作文の点数も上がった。

仮説2

継続的な作文タイムの実施により、基礎的な作文力がつくであろう。

実践2

2学期の中間テスト後から、作文カード(3cmくらいの紙片に1枚ずつ基礎単語を書いたもの、B4に30個程度書いて切らせた)を個人に持たせ、5分程度の作文タイムを毎授業取っていった。最終的に期末時には、be動詞や一般動詞の3人称単数の作文タイムを行った。英語が苦手な生徒も作文タイムに参加できるように、まずは単語カードを覚えるテストを行ってから作文タイムの実施をし、配慮をした。研究授業を行った。

検証2

最初はカードの単語を覚えることから苦労していたが、2学期末には、即座に英文文ができる生徒ができた。時間のかかる生徒もまだいるが、作文タイムにかかる時間が短縮された。英語が得意な生徒は1番に作文を完成させようと競争し、意欲も高まった。中間テストのときの作文課題の平均点と、期末テストのときの平均点とが、ずいぶん違い、成果が出た。生徒の感想にも「作文の点が上がってうれしい」という声が多かった。

仮説3

単語のテストの継続により、豊かな表現力が身につくであろう。

実践3

学年全体の基礎基本の単語力の強化を目標にし、1学期には8回、2学期には、16回の単語のテストを行った。英語が苦手な生徒については、加力を行い、単語の学習帳を1日1ページ課題として出した。また、放課後や昼休みに、1人ずつ基礎単語の追加テストを行った。最終的に、I, youなどの主語については、全員の生徒が、英単語を見て、読めて意味が言えるようになった。現在は引き続き基礎動詞マスターに取り組んでいる。

検証3

英語が苦手な生徒も、基礎単語を見て意味が分かり読めるようになってきたので、基本的な作文の練習がスムーズに行えるようになってきている。作文のスピードもかなりあがってきた。授業の中で加力で習得した単語が出てくると、「それ、この前覚えたがってね!」などと、発表も多くなった。英語が得意な生徒も、「ここをこう変えたらこんな文になるね」など、応用した文を作ったり、自主的に作文を楽しむ様子もあった。

研究の成果

評価の工夫をしたので、生徒や保護者にハッキリと成績の根拠を示すことができたし、各自の克服課題を明示できた。学習すべき点が明確に伝わったため、家庭学習の定着にも役立った。生徒自身が自分の努力すべき点が自覚できたのは大きな成果といえる。単語のテストは、基礎学力の強化に効果的であった。作文タイムについても、2学期期末試験の作文問題の正答率が、中間に比べて24%も上がったことから効果も分かる。加力指導についても、英語が苦手な生徒に、自信をつけることができたと感じている。

今後の授業改善の課題

加力を行う中で、引き続き、単語力の定着・強化が大きな課題であると感じた。やはり単語力が課題である場合、自分が伝えたいことを伝えられるほどの「豊かな表現力」を身につけることは難しい。現在、応用して作文ができるのは限られた生徒であり、英語が苦手な生徒は、基礎単語を覚えることで苦労している。単語のテスト以外に、授業の中で、単語の定着をどうやってはかっていくかが、今後の課題である。